

[133]語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/6796049>

出版情報：語文研究. 133, 2022-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

《会員著書紹介》

勝又基 著

『親孝行の日本史』

——道徳と政治の1400年——

本書は、古代から現代に至るまで、日本における孝の歴史を振り返り、先入観を排して、孝の社会的、文化的役割を考へ直そうとするものである。本書の構成は以下の通り（節題などは割愛した）。

第一章 孝はいかに日本へ持ち込まれたか

——古代から中世へ

第二章 孝の全盛期——江戸時代

第三章 幕府の政策？ 庶民の娯楽？

第四章 荒唐無稽な逸話の秘密

第五章 孝子日本代表を探して

第六章 鷗外と太宰の視線——近代文学と孝

第七章 軍国主義下の子供たちへ——明治から敗戦まで

第八章 敗戦で孝は消えたのか

孝はもともと中国の思想であり、『孝経』は孝を闡明する代表的な儒教典籍である。本書の第一章では、孝思想の伝来か

ら論をはじめ、本来の孝思想と、奈良時代から室町時代にかけての孝思想の様相を述べる。

続いて第二章では、孝行者への表彰に焦点を当てて論を進める。江戸時代は孝の全盛期であり、『本朝孝子伝』『官刻孝義録』などの孝子伝が多く編まれた。著者は莫大な資料を駆使し、孝行者を表彰する方法から表彰者の人数まで、精緻な分析を行いながら、江戸時代における孝思想の実態を明らかにする。

そもそも、なぜ江戸幕府は孝行者の表彰にこれほどの熱意を込めていたのか。第三章では、政治・道徳という二つの側面から、その原因を考察する。そして幕府ばかりでなく、庶民の目には孝行者がどのように映っていたのかについても述べる。

第四章では、「する孝行」と「聞く孝行」という二種類の親孝行の役割を分析し、孝行話に、荒唐無稽な逸話がよく見られる理由を探っていく。さらに、「行動」と「結果」の面から、なぜ孝行話が人の心を揺さぶることができたのかを解き明かす。

第五章では、天皇、儒者、孝女、高僧など、孝子伝に登場する代表的な孝行者を紹介し、中国の『二十四孝』に対抗するために日本の代表的な孝子を選出した、江戸時代の潮流について説明する。

第六章では、江戸の孝を描いた近代小説を手掛かりに、近

代人の目に映る孝を究明する。著者は翻案小説と原作との周到な比較・検討を通じて、森鷗外と太宰治が近代人の目線に立って江戸時代の孝行話を翻案していたことを明らかにする。そして、第七章においては、新聞、褒章名鑑、少年雑誌などの資料を広く調査したうえで、明治維新から敗戦までの孝の実像に迫っていく。明治維新は最初期から、孝行者表彰、忠孝主義教育が進められていたが、戦況の悪化に伴い、孝の宣伝が下火になったと指摘する。

第八章では、昭和五十年代以降、高度経済成長、少子化等を背景に、孝行者表彰は、作文コンクールなどのような、時代に応じた新しい形で復活し、残り続けていることを述べる。以上のように、本書を通して、日本における孝の歴史と沿革の実態に触れることができる。また、孝行者表彰の消長によって、日本社会の変遷や考え方の変化も窺えるであろう。

(令和三年十一月 中央公論新社 新書判 二三三頁 八六〇円＋税)

日高愛子 著

『飛鳥井家歌学の形成と展開』

本書は、幕末まで堂上歌学の中心であり続けた飛鳥井家の歌道家としての系譜を辿ることで、歌道家がどのようにその

時代や社会を生きていったか、また歌学とはどのような意味を有していたのかを、時代性や地域性に注目しながら通史的に述べたものである。本書の構成は以下の通り（論考篇の節題や資料編の収録作品名などは割愛した）。

論考篇

- 第一章 飛鳥井流秘伝の形成
- 第二章 『古今榮雅抄』再編をめぐる問題
- 第三章 『蓮心院殿説古今集注』諸本の性格
- 第四章 雅康の定数歌にみる嫡庶の問題
- 第五章 近世前期における歌学の継承と相伝
- 第六章 近世前期における地方歌壇との関わり
- 第七章 近世後期の堂上派地方歌壇の展開
- 第八章 幕末期の古今伝受

資料篇

平安後期頃に歌道家が生まれて以降、歌道家は勅撰集に携わり、歌の添削など実践的な指導を行うことを家業とし、それぞれに歌の道を相伝し、歌学を継承してきた。その中で、『新古今和歌集』の撰者として定家と名を連ね、歌道家として家を成したのが、後鳥羽院の蹴鞠の師範でもあった飛鳥井雅経である。雅経以後、飛鳥井家は歌・蹴鞠両道の家であることを強みとし、将軍家などの武家に広く指導を行うという重

要な役目を担いながら、歌道を継承してきた。このように、飛鳥井家は歌壇の中心で歌学を継承し、近代にまでその伝統を繋ぎとめようとした重要な歌道家であった。しかし、これまで飛鳥井家の歌学に関するまとまった研究や、近世中期以降の歌人に注目し、評価するものはなかった。

本書の第一章から第三章は、歌書や歌学書を取り上げることはもちろん、その周辺の秘伝書や作法書などの史資料にも広く目を配ることで、飛鳥井流の秘伝の形成過程を明らかにしたものである。続く第四章から第八章は、さまざまに時代を経るなかで形成された歌学が、どのように変容し、継承されたのかを、飛鳥井家の歌壇活動や、地方大名をはじめとする地下歌人との関係によって考察している。また、資料篇には、『古今和歌集』の注釈書である京都府立京都学・歴史館蔵『古今集注』の翻刻や、飛鳥井家が大名や禁裏に相伝した歌会作法書の翻刻なども収められている。

飛鳥井家歌学の継承を通史的に詳らかにした本書を通して、これまで注目されることの少なかった近世中期以降の歌道家の家継承をめぐる問題や堂上歌学の変遷を広く把握することが可能となるに違いない。

(二〇二二年二月 勉誠出版 A5判 五二八頁 一一、〇〇〇円＋税)